

学位論文内容要旨

論文題目

Impact of superselective transarterial infusion therapy of
high-dose cisplatin on maxillary cancer with orbital invasion

(進行上顎洞癌の治療戦略に関する研究:超選択的動注化学
放射線同時併用療法の予後分析)

指導(紹介)教授: 細矢貴亮

申請者氏名: 鹿戸将史

【内容要旨】

背景と目的: 山形大学医学部附属病院では、1998年より進行上顎洞癌に対して超選択的動注化学放射線同時併用療法を施行してきた。本法により、進行上顎洞癌の局所制御率、原病生存率および組織温存率は著しく向上した。本研究では超選択的動注化学放射線同時併用療法の有用性を検証する。

対象と方法: 対象は1998年から2007年までで、超選択的動注化学放射線同時併用療法を施行した進行上顎洞癌の23例である。23例のうち、15症例で眼窩浸潤があり、11症例で内頸動脈からの栄養を認めた。全ての症例に対し、顎動脈や他の外頸動脈の栄養血管から動注した。手術後、摘出病理標本の組織学的完全奏効(pCR: pathological complete response)率とともに、生存率、眼球温存率および原病生存率について検討した。

結果: pCRと生存率はそれぞれ95.7%、78.4%であった。2例が肺転移により死亡している。1例で上顎洞下壁に局所再発が認められたが、局所再発による死亡はなかった。眼窩浸潤の認められた15例のpCRと原病生存率はそれぞれ93.3%、87.5%であった。眼球は全症例で温存された。

結論: 超選択的動注化学放射線同時併用療法により、進行上顎洞癌の局所制御率および原病生存率は著明に向上した。眼窩浸潤例でさえ、外頸動脈系からの動注のみで眼球を温存しつつ高い局所制御を得ることができる。

(1, 200字以内)

平成 23 年 / 月 24 日

山形大学大学院医学系研究科長 殿

学位論文審査結果報告書

申請者氏名： 鹿戸 将史

論文題目： 進行上顎洞癌の治療戦略に関する研究：超選択的動注化学放射線療法の子後分析

審査委員：主審査委員 吉岡 寿志 

副審査委員 飯野 光壽 

副審査委員 佐藤 恒哉 

審査終了日：平成 23 年 / 月 24 日

【 論 文 審 査 結 果 要 旨 】

本論文は、1998年から2007年まで山形大学医学部附属病院で行われた進行上顎洞癌に対する超選択的動注化学放射線併用療法の効果に関する後ろ向き解析の結果を報告したものである。

山形大学医学部附属病院では、進行上顎洞癌に対して既報の選択的動注化学放射線同時併用療法を参考に、digital subtraction angiography と CT angiography を用いて動注の選択性を高めるとともに、シスプラチンの副作用予防のためチオ硫酸ナトリウムを用いる事でシスプラチンの dose intensity を高め、リドカインやヘパリンを使って副作用を軽減した、効果のより高い選択的動注化学放射線同時併用療法を開発して、進行上顎洞癌の治療を行っている。

1998年から2007年まで23例の進行上顎洞癌に対して本治療を行い、組織学的完全奏効と生存率がそれぞれ95.7%、78.8%と高い効果を上げる事が出来た。2例が肺転移により死亡したが、上顎洞下壁に局所再発を起こしたものは1例で救済治療を行い生存中である。眼窩浸潤の認められた15例では、組織学的完全奏効と生存率がそれぞれ93.3%・87.5%で、眼球は全症例温存された。以上、山形大学医学部附属病院で工夫された選択的動注化学放射線同時併用療法は、上顎洞癌において局所制御率と原病生存率の著しい改善をもたらしている事が報告された。

本審査において、予備審査で指摘を受けた「研究の新規性をアピールするようなプレゼンテーションの必要性」、「提出論文の日本語が読みにくい点」について十分改善されており、眼窩浸潤例でも顎動脈からの動注のみで十分であり、眼動脈の動注は必要がない点に関する仮説に関しても、プレゼンテーションに工夫が見られた。これらの事から本審査は合格と判定された。

(1, 200字以内)